

## もの言う牧師のエッセー 第339話

## 「土俵で救命」

4月4日午後2時5分、京都府舞鶴市で開催された大相撲春巡業で、土俵上で挨拶中の多々見良三市長が突然くも膜下出血で倒れた。相撲協会関係者ら男性数人が土俵に上がったが何もできず、多々見市長を囲んでいるだけの状態が20秒ほど続いた。とその時、女性一人が客席から駆け寄り、「上がっていいですか？看護師です。心マ（心臓マッサージ）が出来ます」と言いながら土俵に上がり、人をかき分け、多々見市長に心臓マッサージを始めた。

この後すぐ3人の女性が逐次土俵に上がって手助けに加わったが、「女性の方は土俵を下りてください」とアナウンスが3回繰り返された。後から上がった女性らは戸惑った様子で土俵を下り、2番目に上がった女性は処置を続けたが、到着した舞鶴署員と交代。市長は病院に運ばれて手術を受け一命をとりとめたが、後になって大量の塩をまくなど、人命よりも“女人禁制”の伝統を重視したような協会の対応に非難轟々となった。

いっぽうで、中心になって見事な処置をした女性への賛辞が止まない。「女性の救命措置がなければ、亡くなっていた可能性もあります。すばらしい対応ですね」と絶賛するのは小倉記念病院脳卒中センター長・脳神経外科主任部長の波多野武人医師。「救急蘇生のスペシャリストと考えられます。文句のつけようありません」と日本救急医学会の「ICLS コース」ディレクターの大房幸浩氏。でも当の女性は「当たり前のことをしてだけ」。

この“当たり前”が難しい。ルール、慣習、伝統、マニュアル、そして宗教。これら本来は人々の生活を善くする為に存在するものが、時として逆さまになって人を縛り、“ルールの為に人が存在する”かのような正に教条主義。実はイエスが最もこだわったのがこの点だ。聖なる日である安息日（現在の日曜に該当）は基本的に「仕事をしたらアカン」が規則であったが、イエスは安息日に大いに働き人々を癒し救われた。そして

**「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるでしょうか。」**                      **ルカの福音書14章5節、**

と言っている。そんなややこしい話しではない。ポイントは「人を救う」当たり前のこと。この一件から教会やクリスチャンも学ぶべきことは多い。飲酒、ゲイ、離婚、犯罪者などなど。「アカン」ではなく、救うことを考えよう。イエスの力によって。                      2018-6-9

